

## 96年度「北河内地域における生活環境と環境デザイン原理 に関する研究」中間報告総括

Research on Man-environment and its Environmental  
Design Principle in Kitakawachi Region

主任研究員：谷口興紀

分担研究員：山村 悟 植松曄子 谷口興紀 星野 暁 奥 哲治 中川 等  
浜田ひとみ

谷口興紀主任研究員が海外留学中のため、代わって筆者（奥）がこの中間報告総括を担当しましたことを、まずお断りいたします。

「地域」研究の主題は、自然的歴史的社会的な意味の連関が重々無尽に重なった独自の文化的意味をもった「場所」のあり方にある。人と人とかかわり、人と物とかかわるとき、そこにかかわりを生み出す意味の場が開かれ、文化が形成されるが、その文化の場は「物」によって「場所」においてつなぎとめられることで、時の経過とともに深みと厚みを刻まれ、意味深い生活環境を生成して行くことになる。そこでの「物」や「場所」は、様々な空間的、時間的意味連関の重層する焦点として文化によって形成されながら、ひとたび形成されたならば、今度は逆に、その文化を支える「物」や「場所」として文化を耕す力を与えることになる。地域における生活環境の研究は、その焦点となる「物」や「場所」を文化の生成の豊かな意味連関の現場に連れ戻すことであり、環境デザイン原理の研究は、この場を開く「物」や「場所」の動的なはたらきのありかたを明らかにすることをめざしてなされている。「北河内地域における」と限定されたこの長期的共同研究は、北河内地域の時間的空間的広がりの中、重層した襞をもった意味連関のあり方を、「物」や「場所」に即してひとつひとつ丁寧にときほぐしながら、文化の生きたはたらきの姿を分担研究の共同によって多様に提示してきた。本年度も、7名の分担研究者によってさらに広がりや厚みのある中間報告がなされているが、各研究の特色を以下のように指摘しておく。

枚方市の「ひらかた大菊人形」という催事がもつ文化的な意味連関が北河内を越えた大きな広がりや伝統からとらえられている点、また「河内木綿－織物」が日本を越えて韓国の文化や生活様式との関連から調査されている点など、北河内の文化的独自性が、逆に北河内を越えた文化的伝統によって形成された面をもつことのこれらの報告は、地域文化の形成の現場が動的な大きな広がりの中にあることの貴重な指摘である。また北河内の「伝統民家」と「路傍祠」の研究は、詳細な調査によって歴史的社会的な生活環境の意味連関の焦点になる「物」の動的な形成のありかたを報告している。これとは逆に、新しい地域の意味連関の焦点になる「物」の創造のあり方を報告しているのが「環境オブジェ」

の制作研究である。「生活環境情報ネットワークノード」の研究はインターネットを通して文化創造をめざした新しい共同研究の場を開く試みである。「教育環境」に関する研究は、文化という場を開く物や場所の動的あり方についての基礎的な報告であるといえる。

## 分担研究報告

### 北河内地域における公共空間の視覚的アメニティに関する批判的研究 山村 悟（工学部）

当初の分担課題である、北河内地域各市の公共空間における造形物（いわゆる「パブリック・アート」など）の環境デザインの視点からの調査、研究にひとまず区切りをつけ、平成6年度から、枚方市の「ひらかた大菊人形」を新しいテーマに取り上げた。

「ひらかた大菊人形」は、1910（明治43）年開通の京阪電気鉄道が、沿線開発と旅客増の一手法として、興行師や造園業者、人形師らに依頼して同年秋、枚方市香里丘陵で始めた。その後、京都府宇治や大阪府千里山への短期移転、あるいは戦争による中断などの曲折を経て、1949（昭和24）年から現在地で秋の「ひらかたパーク」メイン・イベントとして定着した。

近代日本の初期型マス・レジャーの主役に取り上げられ、戦後のカラー・テレビ普及以後は大河ドラマなどのマス・メディア・イメージと結びついた、この菊人形という催事が枚方市（1947年市制施行）の市街、文化形成に及ぼした影響を調べるとともに、菊花という植物素材による、きわめて日本的な造形のルーツをたどる作業を並行してすすめた。

菊人形の原型の菊細工は、19世紀初頭の文化年間に、江戸麻布で始まり、麻布狸穴や染井、巢鴨などで一時、植木職が競って趣向を凝らしたという。明治に入ってからも国技館の菊人形が秋の東京名物だった。

これらのことは三谷一馬編『江戸年中行事図聚』などの資料で確認できるが、私は現代の「菊人形」が愛知県高浜市（三河地方）に存続する「吉浜の細工人形づくり」と結びつき、その伝統技能に依存することを、京阪電鉄遊園事業部の古参職員や高浜市郷土芸能関係者らからの聞き取りと、現地に残る資料の調査で確認することができた。

「吉浜の細工人形」は、江戸期の17世紀半ばに始まる仏教催事と豊作祈願の農民芸能が結びついた地元の二つの寺院と名古屋市熱田神宮の奉納行事（いずれも現在は5月8日）にかかわるもので、この行事と地元の人形づくりの技能は衰退寸前でようやく1964年、愛知県無形文化財に指定された。奉納され、一部が保存されている細工人形は、木の根、稲わら、棕櫚、松かさ、竹皮、貝殻などあらゆる日常、身の素材を自由に使用している。細工人形自体は菊を使用した歴史を持たないが、その伝統芸能が買われて、吉浜の人たちは秋になると現代版細工人形師として、各地の「菊人形」に出かけて行く。

私は、いかにも海辺の農民らしいナイーブ・アートとしての吉浜の細工人形の造形手法は、伊勢湾 — 太平洋系のもと考え、1996年度は鳥羽市「海の博物館」の資料などにより、さらなるルーツさがしに手をのびた。この部分の調査はまだ不十分だが、次年度には「菊人形の多角的研究」を終えて小論にまとめたい。

## 河内木綿と韓国のクラフト－織物について 植松暉子（工学部）

となりの国・韓国へ、平成8年10月31日から11月5日まで、河内木綿－織物との関連について、釜山・安東・全州・慶仁・ソウルを調査した。中東部地域にある安東市河回村は、一步足を踏み入れると名門・ヤンパンの村らしいたたずまいが展開される。この村は現在韓国で民族村に指定されており家々の姿形も昔のまま、床は油紙が敷かれオンドルで暖められている民宿に泊まる。翌朝83歳になる日本語の話せるがほとんど韓国語でしか、しゃべらない村の代表者の長老にいろいろと村の話、歴史などを聞く。木綿織については、綿は高麗末に文益慚が中国の元の国から綿花の種を持ち帰り栽培した後、北部韓国の威鏡道の一部を除いて全国のあらゆる地域で栽培されるようになった。北河内地方の綿は、南国の方から伝わったと聞いており、今回の調査では韓国からも伝わったのかどうか、はっきり判明されなかった。しかし、多くの渡来人が織物をしていたとも云われており今後のルーツ解明を続けたい。綿を栽培し、綿花をとり、糸車で糸を紡ぎ、織る、藍染めに染める手法は全く同じ。しかし、龍仁の韓国民族村や資料で見かけた機織り機については、いざり機で床面に近く低い。体を機織り機にひも等縛り固定し、踏み木でなく踏みぞうりの様なわらぞうりを踏んで綜統を上下して織る糸くり機、糸巻き、杼はすべて木質であるが、わずかながら形の相違が見られる。箆は、竹箆でわが国のものと全く同じで感動した。細かい箆からは、細い糸を紡ぎ薄く軽い上質の物が織られていたと、考察される。中でも羅州地方で織る細い経糸を用いた織物を羅州細木綿と云って高く評価されている。韓国の関西地方では、淡灰色、又は淡い黄色の木綿織の布地が特産品であった。ほとんどが2枚綜統のプレーンな平織で韓国人の衣服にも影響されているのではないかと思う。今回の調査では、河内木綿となんらかのつながりを求めて、いろいろと廻って来ましたが、はっきりと判明しなかった。生活様式などからも、くわしく調査分析すれば、また答えが得られるかもしれないと思い、継続して調査をしていきたいと思っております。

## 北河内地域生活環境情報ネットワークノードに関する研究 谷口興紀（工学部）

### 1. はじめに

「情報」の性格として、「在るもの」の傍らに立つという観点を、本研究の中間報告を資料として「北河内研究のホームページ」をインターネット上に開設することで、一層深めることを試みる。ホームページの意義として以下が挙げられる。

- ① 本研究の成果の参照を容易にし、電子メールのやりとりにより、時間的・空間的制約に縛られることなく研究についての意見交換を容易にし、その過程で研究の統合の実がより上がることが期待できる。
- ② 研究情報が電子情報化されることにより、「まとめ」の作業の一助になる。

③ インターネットは、大学外へ通じているので、原理的に北河内地域へ研究の成果を公開することになり、地域に開かれた研究という理念の一つの具体化である。

④ インターネットの物的存在以前とそれ以後の研究方法やその展開の違いを比較することにより、この分担研究テーマに資する情報を得ることができる。

## 2. 中間報告文の電子情報化

中間報告文は、「大阪産業大学産業研究所所報」に記載されているものをスキャナー（エプソン GT5000WINP）と OCR変換ソフト（WinReader PRO Version 3.5）によりテキストファイル化する。本文をコピーする段階で、濃度を濃くすると「実用的に」変換できる。コピーした段階で、活字の線の一部が途切れていると、人の目は、前後関係の字句とその活字全体のパターンにより正しく読むが、このソフトは、途切れていない部分だけを独立したものとして判読する。つまり、インクの粒が存在しているということだけが情報となっており、「前後関係や全体のパターンから、インクの粒が存在していた筈だ」という処理は行われていないようである。蓮の写真は、デジタルカメラ（リコー DC-2 41万画素）により、文献から複写したものである。

## 3. ホームページの今後

研究者の立場からは、単に中間報告が画面上で見れるというだけではなく、ハイパーリンクを、その気になって研究的に生きることにより、テキストの内容を改め、新たにハイパーリンクを再構成することの往還により、研究の総合性を高める手段として捉えられる。しかし、現在のホームページ作成用のhtml言語では、参照の単位の区切りとそのリンク張りが手作業であり、平成5年度から着手している「検索システム」とのシステムの整合性を取ることが今後の課題である。

（場所：<http://www.edd.osaka-sandai.ac.jp/~tanig.kkw.html>）

## 泉佐野市総合文化センター、アート計画を土台とした環境オブジェ制作研究 星野 曉（工学部）

先年オープンした関西空港の表玄関として、またその臨空タウンを擁する泉佐野市が「世界に開かれた先進の町づくり」をめざし、それを「象徴する施設」としてこの総合文化センターアート計画を発足させ、建設推進してきたが、平成8年5月完成に至った。この計画にアートモニュメント一点の制作依頼を受け、それを制作研究課題として作業してきたので、ここにその結果を報告したい。

作品制作については、前年度の報告でなされているので省略し、平成8年度の主たる仕事であった設置作業について触れたい。私の作品に与えられた場所は、広場の西側、泉の森ホールの東口前の浅く水の張られたプール状の空間である。この敷地全体が4つの建物（文化会館、歴史館、図書館、生涯学習センター）を取り込んだ大庭園となっているが、この庭園を北東の端から南西の端まで斜めに石造りの水路が走っており、その途中で池のようにプールが設けられている、そこが作品の設置場所である。水位30cmの浅いプール状

空間、ここに前回記したように分割配置（インスタレーション）の方法をとった8つの部分が飛び石状に置かれる。プール全体とのバランスは水面部＝地＝余白との比率でもあるが、それが第一のポイントであり、水面からの高さが第二のポイントである。それはすでに報告したように図面と模型で試作済みであった。本作品設置でもうまく行ったが、一つ、水底の玉石の一つ一つの大きさが造園家の考えと少しズレていて設置に苦労した。次に作品を浅いとはいえ、水の中にかに固定するかが重要な問題であったが、当初の考えでは図1のようにプールにコンクリートの土台を据え付け、そこに中空、底部開口の形に仕上げられた作品をスッポリ上からかぶせてそれで問題なしと考えたが、厳密な土台作りは期待できなかったので、高さは一定に作って貰い、後はレンガとセメントで調整しながらかぶせて仕上げた（図2）。土台と作品との接着は主にセメントで行ったが、水中ボンドを要所要所に使った。また作品の側面の強度も不安があったので、その内側はすべて水中ボンドをぬることで補強した。

平成8年5月完成したが、オープニングで見た作品の印象は、まず空間のバランス＝配置は良く出来ていたと思う。黒陶の質感に関しては、周囲の石材やタイルの質感がピカピカであるのに、黒陶がやや古色を帯び多少の違和感があったが、いずれ時間と共に周囲の材質ともうち溶けなじむと予想される。今後この作品の耐久性が、予備実験通りに行くか。またこの総合文化センターが住民にどう使われ、住民や地域全体の生活文化にどう影響を与えるか、調査し、見守ってゆきたい。

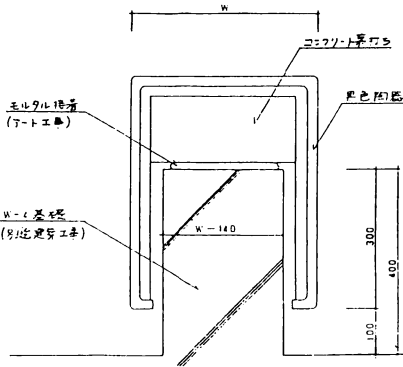
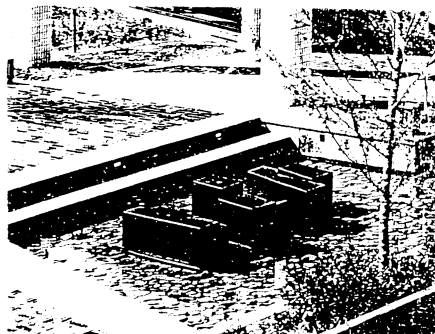


図1 基礎断面詳細図1/5



図2 「表層・深層」制作風景



完成図 「表層・深層」266×152×57cm黒陶 1996年5月

# 学校教育と地域環境のかかわりに関する基礎的研究と 具体事例（北河内地域）の調査研究 奥 哲治（工学部）

〔中間報告〕

A：基礎的研究……地域環境のもつ教育的な可能性について建築的に関心することは、主に環境の建築的な構成（物的空間的場所的な構成）と、広義の教育的なことがらとの関係を問うことにある。その際、幼児教育の創始者であるF. フレーベル（1782-1852）が設立した「Kindergarten 幼稚園」に注目してきた。彼はこの新しいく子供と大人のための教育施設を「Kindergarten」と命名し、その理念の実現のために植物の成長の場所である「Garten庭」を要求したが、教育行為の場を限定する建築的な「場所」の問題としてこの「Garten」のあり方は興味深い。狭義の教育行為の場は子どもと大人がそれぞれのよきあり方をめぐって交わる場であり、人間の共同と生成が主題化される場である。その際、何よりも大切なことは子どもが自分自身で学んでゆくそのプロセスであり、子どもの学びに向けた働きそのものが活性化されることである。「自分自身で」と言われるその働きがはたらくためには、かかわりをもちうる場がすでに開かれていなければならないが、その場が「かかわり」の場であるかぎりにはそれぞれが自分自身の力のみでその場を開くことはできない。子どもが学ぶとは、多くの物や人のかかわりが重層し広がってすでに開かれている場に於いて、そのかかわりを生き生きとしたダイナミックなものにすることであり、自分自身がそのかかわりをはじめから生き直し、かかわりを生み出すプロセスに身体全体で参与することである。したがって、大切なことはそのはたらきを生みだし、自らもそのかかわりを生きている「自然」そのものがその場に参与しているということである。この自然の参与するかかわりの場（Garten）において、同じ自然のいのちに生かされた子どもがそのかかわりを生き、かかわりの広がりのなかで自分自身を生成させてゆくことは、自然から自分自身のあり方を学び、自分自身で自然に学ぶ、広義の教育的な行為である。フレーベルのKindergartenは、植物（樹木）の世話がなされる場所Gartenと教育行為の場を本質で通底したひとつの連関でとらえた施設である。教育行為の場にかかわる建築的な環境の構成も、自然のはたらきが参与し、かかわりを生み出すはたらきにおいて行われる教育に、自然のはたらきを手本にした建築的構成が参与するとき、そこに教育の場所が子どもの生成と同時に生成することになる。

B：具体的調査研究……大東市域においてその固有の場所性を形成している河川空間の調査研究を行っており、場所的な雰囲気とその場所固有のリズムとしてとらえ、その特性を具体的な建築構成のリズムに反映させ、設計者の恣意を超えたデザインの手法のケーススタディを行っている。

## 北河内地域における伝統的住環境と民家に関する研究 中川 等（工学部）

平成3年度より8年度にかけて、北河内地域における近世から現在にいたる住環境と民家の形成と展開の過程について史的な考察を加えた。これまでの中間報告で述べたように、3年度は高塀造りと瓦葺き民家について、4年度は『河内名所図会』について、5年度は近現代の地形図について論考し、6年度は伝統的住環境に関する現地調査を実施し、7年度は交通の発達と住宅地拡大の経緯について考察を加えた。

8年度は、北河内地域の伝統的民家の詳細調査を行う機会をえて、既往の研究成果と対照しつつ建築形式と空間構成について分析を加え、向後の問題点を抽出した。

調査の内容は、①建物の由緒沿革・建築年代を調べる、②構造形式・保存状況を確認する、③実測図面（平面図・断面図・配置図）を作成する、④写真を撮影する、⑤部材の新旧と痕跡に基づき復元的考察を行い、当初形式と変遷過程を解明するものである。

調査の対象は、門真市内の伝統的民家3件で、旧庄屋あるいは上層の農家建築であった。敷地面積は約400坪、主屋建坪は約50坪（当初）で、大きな規模に属する家構えであった。当地域の民家は屋敷・建物規模の格差の大きいことが知られているが、かつての社会構造や生業形態との関連が推察されて興味深い点である。

復原平面については、2件は梁行に3室ずつ2列に並べる整形六間取り、1件は土間沿い3室、上手2室の五間取りを基本とし、土間側に落間を張り出し、正面に縁側を設ける。近在の北田家住宅・山添家住宅（ともに交野市・重文）をはじめ河内・大和地域の大規模民家と類似した平面をもつ。今後の問題点として、表室・中央室境が薄鴨居と欄間という比較的軽い間仕切である一方、表側2室境の間仕切が差鴨居・狐鴨居で欄間をもたない点、正面の縁側が幅半間以上の広縁であったと思われる点、土間沿い裏室及び広い土間の当初の仕様と構成、屋敷下手にあったというヒナダ（洗い場）の形式など、住まい方も含めて伝統的民家の建築形式と空間構成について再検討する必要があるだろう。

構造については、茅葺き切妻屋根の妻壁の骨組みが注目された。当地域には高塀造りの民家が分布しているが、今回の調査事例の1件は上手を切妻、下手を入母屋につくる一種の高塀造りであった。その妻壁は約半間ごとに束柱を建てて土壁をつくり、1/4間内寄りに同様に束柱を並べて、相互に縦横の貫を通して固める頑強な造りであった。入母屋・寄棟のように4面とも茅葺きの一様な屋根手法と異なり、切妻の場合は妻壁の構造的自立と茅葺き屋根との納め方が問題になるが、この事例は合理的解決策の一つと考えられる。

伝統的民家の建築調査は今年度より開始したが、今後、住生活も含めて調査事例を増やして研究精度を高めていく予定である。

## 北河内地域における路傍祠に関する調査研究 浜田ひとみ（工学部）

平成8年度は、これまでの北河内地域7市（大東、枚方、四条畷、寝屋川、交野、守口、門真）に引き続き、中河内地域2市（東大阪、八尾）、南河内地域一部の2市（松原、藤井寺）の現地踏査を昨年度と同様の調査方法で実施した。今回の報告では、調査項目の分析には項目数が多いためふれず、各市の面積と路傍祠の数についての考察をおこなった。

表1の路傍祠の分布密度をみると、東大阪が最も高く、大東、藤井寺が続いており、他の市を比較しても、北河内、中河内、南河内の3つの地域差は認められない。地理的条件に関しては、ほとんどの市が生駒山脈を一部含んでおり、平地部と山間部の割合はほぼ同じである。分布密度の較差が土地利用条件によるものか、また、旧集落に多く、新興住宅地には少ないのかを明らかにすることが今後の課題である。

表1. 各市の面積と路傍祠数の分布密度

		大東	枚方	四条畷	寝屋川	交野	守口	門真
市の概要 H7.12.1	面積(km <sup>2</sup> )	18.27	65.07	18.74	24.73	25.56	12.71	12.29
	人口(人)	128,650	397,841	54,187	260,490	74,145	157,602	141,900
	人/km <sup>2</sup>	7,042	6,114	2,892	10,533	2,901	12,400	11,546
路傍祠数 個/km <sup>2</sup>	サンプル数	120	63	83	45	69	52	42
	存在する数	116	62	83	45	69	52	42
	分布密度	6.35	0.95	4.43	1.82	2.7	4.09	3.42

		八尾	東大阪	松原	藤井寺
市の概要 H7.12.1	面積(km <sup>2</sup> )	41.71	61.81	16.66	8.89
	人口(人)	277,925	518,662	134,926	67,407
	人/km <sup>2</sup>	6,663	8,391	8,098	7,582
路傍祠数 個/km <sup>2</sup>	サンプル数	189	498	57	59
	存在する数	171	451	61	55
	分布密度	4.1	7.51	3.66	6.19

データを収集する一方、その地域の住民もしくは子供たちに対し、路傍祠を媒介としてそれらに気づかせ、自分たちの住む町を知ってもらおうということを、本研究の別の目的としている。将来子供たちに教える側に立つ奈良教育大学の学生160名に、路傍祠（地蔵）がどのような存在であるかというレポートを書かせた（1996.7.17 実施）ところ、「気にもとめたことがない」「小さい頃は今よりも身近であった」という意見が多かった。「信仰の対象ではなく風景の一部である」「昔や故郷を思う」「祖母より地蔵を大切にするように教わった」という少数意見もみられた。地蔵に対し愛着心の感じられる表現を多い順に挙げると「手を合わせる」「お辞儀をして通る」「ふと拝みたくなる」「神を信じる」「お願い事を毎日する」「会話をする」「心の中で手をあわせる」など計18名、約1割の数に上り、路傍祠を媒介とするまちづくり学習の可能性と必要性のあることがわかった。